

# 介護福祉士養成における多世代交流の意義について

## — ことぶき大学校生との交流から —

### About the Meaning of the Multi- Generation Exchange in Care Worker Training From the Exchange with the Kotobuki College Student

清宮 宏臣

**要旨：**介護福祉士を目指す本短期大学の学生と気力あふれる高齢者との交流について、交流後のそれぞれの感想を中心に、交流の意義と課題をまとめた。高齢者に対するイメージが「心身がおとろえて」など弱者のイメージで捉えられることが少なくない中、介護福祉士を目指す学生においては、気力あふれる高齢者との交流が必要であるのではないかと考えた。グループ討議による交流を通して、本短期大学の学生（以下、本学学生）は高齢者の新たな一面に触れ、同世代の友人からは聞くことができない意見や考えなど、多くの学びと気づきがあり、交流を大変有意義に感じていた。一方、ことぶき大学校生も交流自体は好意的に受けとめているが、内容や時間の短さなど、より一層の交流内容の充実を求めていることが確認できた。

**Key Words：**多世代交流、高齢者のイメージ、介護福祉士

---

#### 1. はじめに

介護福祉士を目指す学生の高齢者に対するイメージがどのようなものであるかは、大変重要なことである。なぜなら、そのイメージに基づいて、介護福祉の実践が展開されるからである。高齢者に対するイメージとして、たとえば「加齢による身体変化の特徴『顔のたるみ』、『白髪』、『肌にシワ・シミ』や『無表情』、『入れ歯』等という形で表現される外見上の高齢者のイメージである。さらに、そのような高齢者が外見上で表現するものは『腰が曲がる』、『足腰が弱い』、『身体が不自由』等のイメージに連動し、衰えていく高齢者像が形成され（中略）機能低下や衰えを感じているので、『寝たきり者が多い』や『オムツをつけている』というイメージや家族、

地域社会から『孤立しやすい』し、『友達が少なくなる』という『弱者のイメージ』が前面に  
でる」(伊藤和子 2006: 81)、というようなイメージで語られることがある。また、「心身がお  
とろえ、健康面での不安が大きい」(内閣府 2004: 64)という虚弱な人というイメージが少な  
くない。そして、施設での実習を実際に体験した学生の中には、施設における介護の仕事とい  
う業務の流れに目を奪われるあまり、いつの間にか一人ひとりの個別性や主体的な自立といっ  
た重要な視点が薄れ、食事の支援や排泄の支援などをくり返し行うことで、より一層、高齢者  
は虚弱であり、自立が難しい人という印象をもってしまふことさえある。ベッドからの寝起き、  
移動、食事や排泄などが自分の思うようにいかない人というイメージである。

介護福祉士は、このような方々への支援を提供する専門職ではあるが、どんなに高齢であろ  
うとも人間の生涯発達という視点に立って、その人の自主性や主体性を尊重し、その人の可能  
性を見出しながら生活を支えていく視点が必要である。高齢者に対するイメージが「虚弱で」、  
「障がいも多く抱えて」、「意思疎通ができなくて」など、負の側面ばかりに固定観念化してし  
まうと、介護支援に必要な、その人が持っているだろう力を見出すことやその人が主体的に生  
活することを支える視点が遠退いてしまう恐れが考えられる。高齢者に限らないが、ICF（国  
際生活機能分類）においても、負の側面ばかりを見るのではなく、正の側面からみることへの  
転換がなされ、介護福祉の実践において重要な概念となっている。介護福祉士を目指す学生に  
おいては、高齢者に対する負のイメージの先行化や固定化をできるかぎり避け、高齢者に対す  
る、より前向きなイメージをもってもらふことが必要と思われる。

そこで、介護福祉士を養成する立場から、一つの試みとして、ことぶき大学校生という健康  
で気力あふれる高齢の方々と介護福祉士を目指す本学学生とが共に学ぶ、交流する機会を、グ  
ループ討議という形で設定した。本学学生とは生きてきた時代が違うことぶき大学校生と交流  
することで、本学学生は知識や考え方など新たな学びがあるのではないか。本学学生が、人生  
経験豊かで気力あふれることぶき大学校生と接することは、高齢者に対する前向きなイメージ  
をもつきっかけになるのではないか。また、この経験が、将来介護福祉士として高齢者への介  
護支援を提供する際においても、活発だったころのその人の今までに思いを馳せ、考え方や生  
き方を尊重する視点をもちつづけることへの動機付けになるのではないかと思われたからであ  
る。

核家族世帯が増加し、祖父母のような高齢者と日常的に接する機会が少なくなったといわれ  
ている昨今、気力あふれる高齢の方々と接し、その方々の考え方や生き方に直に触れることが  
介護福祉士を目指す学生には必要であると考えられる。

そこで、本稿では、本学の学生（地域介護福祉専攻2年生で19～20歳）<sup>(注1)</sup>と年齢60歳以上  
（福祉健康学科2年生）<sup>(注2)</sup>のことぶき大学校生の方々との、世代の異なる方々との交流を意図  
とした今日までの取り組みについて、それぞれの学生の感想を中心にまとめ、多世代交流の意

義と課題について考察する。

## **2. 多世代交流のはじまり**

### **2.1. ことぶき大学校生とは**

千葉市社会福祉事業団が運営している学校で、千葉市内に住所を有する60歳以上の方を対象に、「自己教育」・「地域・多世代間交流」・「社会参加促進機能」・「人材育成機能」を教育目標に、知識や技能を習得する場の提供を行っている。ことぶき大学校は1学年100人の2学年制で、福祉健康学科（定員46人）、美術学科（30人）、陶芸学科（24人）の3学科となっている。心身ともに元気で学ぶ意欲にあふれた方々である。

### **2.2. ことぶき大学校福祉健康学科の学生と本学地域介護福祉専攻の学生との交流**

本学の教員が、ことぶき大学校の福祉健康学科において講師を務めていたことや、本学が地域という広い視野を持った介護福祉士養成を目指しているということもあり、ことぶき大学校の教育目標である「地域・多世代間交流」という観点から、ことぶき大学校福祉健康学科の学生と本学地域介護福祉専攻の学生との交流が進められることとなった。

## **3. 交流内容の概略とそれぞれの学生の感想**

### **3.1. 平成15（2003）年度**

交流は平成15（2003）年度からはじまった。交流の日時や内容については、互いの授業に支障のない範囲で実施できるものを考え、グループ討議による意見交換会を行うこととなった。交流の参加者は本学地域介護福祉専攻の学生とことぶき大学校福祉健康学科の学生ともに2年生である。交流時期は準備や互いの都合等もあって、当該年度の授業が終了した平成16年2月19日に行うこととなった。

グループ討議による意見交換会の内容は、互いに福祉について学んでいるという共通点を勘案した上で、ことぶき大学校生の方々が興味関心のあることを話し合うこととなった。以下に、交流会のテーマと趣旨・目的を記す。

#### **テーマ「介護福祉士を目指す若者との交流」**

##### **趣旨・目的**

「高齢者にとって介護を受けるという状況は避けたいものではありません。まして、他人様に迷惑をかけたくないという気持ちが強いものでしょう。しかし、年月の経過は、必然的に体力・気力の衰えをもたらします。ここに、介護を受けることへの精神的、肉体的な妥協が生じてきます。こうした過程を想像するが故に、高齢者の介護（福祉）に志す若い人へ

の大きな期待と願望が強く湧いてくるのです。ここでは、介護の状況をさまざまに想像しながらの年代層である本ことぶき大学校学生の率直な期待と願望を、そして、それを受けて立とうとする若い人の構えや考え方、また夢などと対峙させながら、これからの高齢者福祉のあり方を互いに考える機会にしたいと思います。」(当時の資料引用)

グループ討議をするにあたっては本学の学生有志約15名程度が、ことぶき大学校がある千葉市ハーモニープラザに出向く形となった。特に決まったテーマはなかったが、「介護福祉士を目指す動機」や「親を介護することについて」など多岐に富んでいた。

ことぶき大学校生約40名と本学の学生とが3グループに分かれて話し合いを行ったが、互いに話し合うというよりは、ことぶき大学校生の方々が発言する場面が多かった。

その理由の一つには、人生経験豊富で話すことに慣れていることぶき大学校生の方々を前にして、本学の学生が気後れしている様子が伺えた。交流会当日が初対面で緊張していたこともあるが、それだけでなく、本学の学生は意見を整理して話すことに慣れていないため、当意即妙に発言することが難しかったのではないかと考えられる。

また別の理由には、上記の話し合いの趣旨にも述べられているように、ことぶき大学校生の方々は、現在は心身ともに元気ではあるものの、近い将来介護を受けるかもしれない身として不安を抱いている。その思いを将来の介護福祉の担い手でもある本学の学生に期待と願いを込めて熱く話をするため、本学の学生が耳を傾け真摯に話を聞く場面が多かったように思われる。

### 3.2. 平成16(2004)年度

平成16年度は2回交流会を行った。本学の学生2年生全員に交流の機会を持たせたいという観点から、1回目に半分の学生(約40名、平成16年6月実施)、2回目に残り半分の学生(約40名、平成17年2月)が交流できる形をとった。

1回目は場所を本学とし、ことぶき大学校生の方々に来ていただくこととなった。その際交通手段に配慮をし、行き帰りについては本学のスクールバスを臨時利用した。

内容については、どのようなことを話し合いたいのかを、ことぶき大学校の事務局で事前にアンケートをとってもらった。その結果から話し合うテーマを「介護にとって大切なもの」「施設内での恋愛(性)問題について」「職業としての介護福祉士について」「望ましい老後とは」の4つとした。

グループは7グループを編成し、1グループ約10名程度(互いの学生5~6名ずつ)。1つのテーマを2グループずつに割り振り(ある1つのテーマは1グループのみ)、テーマに添って話し合ってもらった。

そして、グループ討議を通しての感想を、ことぶき大学校生と本学学生それぞれに記入してもらった。それら感想<sup>(注3)</sup>に基づいて以下にまとめる。

## (1) ことぶき大学校生の感想

ことぶき大学校生が記入する感想用紙は、ことぶき大学校の担当職員の方が作成し、1. 交流した感想はどうか、2. 理解できなかった、または、難しかったことはありましたか、3. こうしたら、よりよかったと思う点はありましたか、4. 今後、希望するテーマや内容がありましたら書いてください、5. その他、意見・感想を書いてください、という5項目について、自由記載となっている。ことぶき大学校生の主な感想をその内容に応じて以下に項目ごとに整理した。

### ① 「交流した感想」

#### ○本学の学生の様子に関すること

- ・「若い学生諸氏の積極的な姿勢に感心した」「介護に取り組む前向きな考え方が将来の現場で活かされると感じた」
- ・「話合いが進むに従って当初の印象（外見から）からは考えられない若者達は自分自身の将来について真剣・真面目に取り組んで学んでいる事が良く伝わってきた」
- ・「介護福祉士を目指そうとした動機をはっきりとしっかり持っているのはさすがでした」
- ・「孫のような学生の話を書き聞いて、みんな一生懸命〔介護〕福祉士の勉強しているなと感心したり、たのしく思った」
- ・「学生側からの意見が、これが本音なのかなあーと言う程真面目にとりくみ勉強しているのにびっくりしました」

学生の介護に対する思いやグループ討議での発言の様子などから、好感を持ったという感想があった。

その一方で、

- ・「学生さんの発言が少なかった。当方からの質問には答えるが、学生さんからの質問はなかった。答える学生さんも数人に限られていた」
- ・「学生さんが質問をしてくれた方がいいのでは」
- ・「発言が少なく、声も小さく、元気がない」
- ・「どうしてもこちら〔ことぶき大学校生〕から学生の方々にお聞きするという型になったので、あちら〔本学学生〕から聞かれることがなかった」
- ・「まだ、若いのでしょう。積極的に話す事に遠慮がちで私達から声をかけて小さな声で

答えが返ってくる程度。これから社会に出ると変わってくるでしょうといふ感じ」

このように、グループ討議での学生の発言の少なさがうかがえ、学生の消極的な姿勢に対する不満ともとれる感想もあった。

学生の様子に対する感想がこのように両極端になった理由の一つに、話し合ったテーマの違いによるところもあった。学生の様子に対して良い印象を持っていた感想は、「介護にとって大切なもの」というテーマで話し合いを行ったグループに多かった。介護に対する考えなどは日頃から学び考える機会が多く、学生が発言しやすいテーマであったのではないかと考えられる。

それに対して、学生に良い印象を持てただけなかった感想は、「施設内での恋愛（性）問題について」のテーマに多かった。「恋愛」に関するテーマは一般的な話としてはできるかもしれないが、「施設での高齢者の恋愛や性」については、普段から考えることが少ない事柄と思われ、本学学生の発言が少なくなってしまったと考えられる。

学生の様子に対する感想が両極あったもう一つの理由は、テーマの違いだけでなく、グループのメンバーによるところも大きい。グループメンバーは単に学籍番号順で割り振ったため、発言する・できる学生とそうでない学生、普段から気心知れた学生とそうでない学生など偏ったグループ編成となったことも考えられる。ただ、全般的に積極的に発言することが苦手な学生が多いことが考えられ、そのことが「元気がない」「声が小さい」などの感想となったと思われる。

### ○近い将来介護を受ける身であろうという立場からの感想

将来介護福祉の仕事に就く本学の学生の発言を聞いて、ことぶき大学校生の方々の中には、自分自身が近い将来介護を受けるであろう身としての立場から感想を書いているものが比較的多かった。

- ・「遠からずお世話になる身としては安心して良いのかなあ…」
- ・「近い将来必ず介護が必要となる私たちにとって、その道のプロを目指して学んでいる若者たちと交流し、職業観や考え方を聞く事ができたのは大変有意義でした」
- ・「若い娘たちが介護の勉強に励んでいる姿は有難い。近々どこかの施設でお世話になるかも…。その時はよろしく!」
- ・「〔学生たちが〕本当に頼もしい姿に見えた。このような人達に介護を受ける身になるかもしれないが、その不安が交流後少なくなってきたような気がする」

本学学生の介護に対する考え方やグループ討議で話す様子などに触れて、いつの日か介護を受ける身という視点から、今後における「安堵感」のような思いを持った感想である。

話合いをしている中で「今後に対する不安」を吐露することぶき大学校生の方もおり、このような気力あふれる方々の「今後に対する不安」な思いを耳にすることができるということは、介護福祉士を目指す学生にとっては大変貴重な経験であると考える。

### ○その他の感想

- ・「日頃若い人たちと話したり集まることがないので今日は心身ともに若くなって楽しいひとときでした」
- ・「若さのパワーもいただくことができました」
- ・「若い学生さん（日頃はほとんど付き合いのない年代）と短時間でしたが、輪になって向き合ってお話が出来た事、それだけでもとても良かった」
- ・「若者の側にとって、とりあえず健康な高齢者を知ることよいことなのではないかと思いました」

祖父母と孫ともいえるような年齢差がある者同士の交流会であるため、若い世代との交流そのものに対して、前向きに評価してくださった感想も散見された。

### ② 「理解できなかった、または、難しかったこと」と「こうしたら、よりよかったと思う点」

#### ○交流時間の短さ、発表報告時間の短さ

- ・「お互いの意見を交換する事が少なくもう少し時間があればと思います」
- ・「もう少し時間が取れたら良かった」
- ・「発表時間が短く各班の内容が半端になってしまったのが残念でした」

このように、交流時間や話合いの時間の短さに対する感想が非常に多かった。

当日は、9：20～9：40を顔合わせ、本日のスケジュール等概要説明、9：40～10：40を討議時間、10：45～11：05を発表報告の時間（各グループ3分）、11：10終了というタイムスケジュールで行った。

討議時間は60分であるが、実際は互いが打ち解けて話合いができるまでに時間を要し、話を深めるまでには時間が足りないということのようであった。また、グループ討議後の各グループの発表報告3分という時間も、「5分はほしかった」という感想もあった。

時間のあり方については、本学の授業の関係により、学生の空いている時間や立ち会う教員が確保できる日時などを勘案すると、1コマ90分しか時間がとれない現状があった。その中で、グループ討議の概要説明、討議と発表報告などの時間配分をせざるを得なかったため、時間の短さに対する感想が多くなったと思われる。

### ○テーマ設定のあり方について

- ・「4テーマは多すぎたのでは？ 学生、私たちがともに学ばねばならない共通テーマについて、話し合いを深めた方が良いのではないか」
- ・「『施設内での恋愛（性）問題について』というテーマが交流のテーマとして相応しかったかどうか、今でも疑問に思っています」
- ・「『施設内での恋愛（性）問題について』、施設内だけをとると話題が少なくなり一般的话题になってしまいました」
- ・「今回のテーマの内、『施設内での恋愛（性）問題について』は適当でないと思う。短大生には未だ早いような気がした」

話し合うテーマについて、特に「施設内での恋愛（性）問題について」のテーマで話し合ったグループメンバーからは、このテーマに対して疑問視する感想が多かった。上記①「交流した感想」においても記したが、本学学生の発言が少なく、内容の深まりや話しの盛り上がり少なかったテーマである。これは、「性」という話しづらいテーマであることや施設での恋愛に関する事例不足などが考えられ、具体的な話には至らなかったと考えられる。事前のアンケートで、ことぶき大学校生の方々が関心のある事柄として確認はしていたが、初対面でいざこのテーマで話し合うとなると、難しいことが明らかとなった。

### ○話し合う環境（教室）のあり方

- ・「一室2グループでは雑音があり集中できない。出来たら一室1グループがよいと思う」
- ・「2組のグループが同室で相手チームの声が高く、かわいい若い人の声が聞きづらかった。〔2グループに〕分けなくてもいいのでは」

授業等の関係で空いている教室を4つしか確保できない現状があった。また、グループ編成の際グループの人数が多くなると一人一人の発言する機会が少なくなると考え、小人数のグループ編成をし、7つのグループとなった。そのため、2つのグループがひとつの教室内で話し合いをするという環境となってしまったことへの感想である。

### ○話し合いの持ち方

- ・「事前の整理準備が必要であることを痛感させられた」
- ・「話し合う内容について、予め班の中で話し合いを行う必要があったのではないだろうか」
- ・「双方とも、もっと具体的な質問事項を用意しておく、より突っ込んだコミュニケーションが出来たかと思います」
- ・「交流の際短い時間の中で、突然話し合いをするというのは如何なものでしょうか？」



例えば一日時間をかけて、午前中はレクリエーションで相互理解を深め、午後に話合いの時間を持つというように」

短い時間で、より深い内容を話し合うためには事前の準備が必要なのではないかという意見である。また、初対面でいきなり話合いを進めていくことが難しいということに対して、もう少し打ち解ける時間をとる必要性への意見があった。

また、下記のような意見もあった。

- ・「司会者は若い学生から意見を引き出すように心がけが必要。どうしてもことぶき大の学生に偏りがちになって若い学生からは意見が出しにくかったのでは？」
- ・「学生側に司会していただいた方がもう少し学生の方々に元気よく会話してくださったんじゃないかと思いました」

グループでの話合いの司会進行役をことぶき大学校生の方々にお願いをしたが、本学の学生が司会をした方が本学の学生の意見をもっと引き出せたのではないか、というご意見である。ただ、司会進行役はその場を取りしきりまとめる力が求められ、しかも年輩の方々を前にして本学学生がどこまで取りしきれるかと考えると、本学学生が司会進行役をするのは難しいのではないかと思われる。

### ③ 「今後、希望するテーマや内容」

- ・「実技実習をやれば〔交流が〕より充実したかなと思う」
- ・「一年生の時実技は一度やりましたが、もう少し踏み込んだ実技をやってみたいと思います」

このように、実践的な介護の技術を求めている方もおり、介護技術演習を通じての交流を希望しているという感想があった。

## (2) 本学学生の感想

本学学生の感想記入用紙は、特に項目立てをせず、自由に記載できるA5サイズの用紙を用意した。

### ○発言が出来なかったことに対する反省

- ・「私達は質問されたことに答えるだけで、自分達から質問することができませんでした」
- ・「少し難しいテーマ〔施設内での恋愛《性》問題について〕だったので、自分の考えがうまくまとめられませんでした」
- ・「自分からはなかなか発言をすることが出来ませんでした。意見を聞くばかりになってしまったので、もっと自分から発言をするべきだったなあと思いました」
- ・「積極的に意見を発言することができなくて貴重な体験なのにととてももったいないなと

思いました」

- ・「話し合いは苦手だったので、一言も意見や質問をせずに終わってしまいました」
- ・「〔ことぶき大学校生は〕積極的にたくさんの意見を言って下さった一方、私たちの意見をとても聞きたがってくださったのに、緊張のあまり、たいした意見を言えなかったことが残念で、申し訳なかったです」
- ・「あまり発言することができず、ことぶき大学校生の皆さんはあまり得るものがなかったと思います。とても反省しています。もし今後このような機会が合ったらぜひ参加して、自分の意見をしっかりと発言したいと思っています」

#### ○介護利用者（介護される）側としての不安な思いに触れての感想

- ・「ことぶき大学校生の方からは介助される側としての意見を言って頂き参考になりました」
- ・「今まで介護者側での交流はありましたが、ことぶき大学校生の方々の意見を聞かせていただいて利用者さんもこのように感じていらっしゃるのかなと思いました」
- ・「これから介護を受ける側として、ことぶき大学校生の方々は自分の理想的な介護の姿、不安など、積極的に意見を出してくださり、（中略）この討論での様々な意見を参考にこれから介護をする立場として介護について考え役立てていこうと思いました」
- ・「『もし自分が介護を受ける立場になったら』ということも語ってくれて、とても勉強になる事がありました」
- ・「元気な高齢の方でも、介護について様々な思いがあるのだと感じました」
- ・「とても活力があるのだなあと感じました。活力にあふれているからこそ、老い、施設に入所することになったときへの不安は計り知れないものだと思います」

#### ○多世代交流そのものに対する感想

- ・「普段あまりこのような意見交換の場がないので良かったです」
- ・「こういった年の離れた方との交流を持てる機会はそうないので同世代からは得られない、また、違った意見が聞けてとても参考になりました」
- ・「ことぶき大学の方の意見は、私の福祉に対する気持ちを再確認させてくれる本当に貴重なものでした」
- ・「私たちが思いもしないような意見をだされていました。普段考えたりしないことを一緒に考えたり、話し合ったりして、その中で今後役立つような知識を勉強することができました」
- ・「植草の生徒だけで話し合ってもこんなに意見は出てこなかったと思う」

・「もう一度自分を見つめなおすことができ、また、これからも自分を見つめなおす機会が必要だと思います」

・「人生経験も多い中での意見や質問の内容はすごく新鮮で貴重なお話でした」

これら本学学生の感想をまとめると、グループ討議での発言について、本学学生自身が発言の少なさを自覚し反省している感想が多かった。積極的に発言できる、意見を述べることができる学生もいるが、全般的には意見を述べることを苦手としている学生が多いようである。ただ、本学の学生にとっては、このような機会を経験すること自体が重要でもあり、自分の考えをまとめ発言するという学びの機会として大変意味のあるものと考えられる。介護福祉士を養成する立場として、このような機会をより多く設定することの必要性を改めて実感した。また、普段かかわることの少ない気力あふれる高齢者の方々の意見に触れ、同年代の友人知人とは違う新たな視点など、多くの刺激を受けている様子が感じとれた。

「介護にとって大切なもの」や「職業としての介護福祉士」というテーマでは、介護福祉士を目指す学生として、改めて介護とは何かなど考え直す機会にもなったようである。特に、近い将来に介護福祉利用者となるかもしれない高齢者の不安というものに直に触れ、介護福祉士を目指す学生として思い直すことが多分にあったと思われる。

### (3) 平成16（2004）年度の交流のまとめ

ことぶき大学校生と本学学生の交流後の感想からわかることは、ことぶき大学校生は、多世代交流として介護福祉士を目指す本学の学生との交流の意義を認めつつも、グループ討議のテーマのあり方や話し合いの深まりのなさなどから、交流の不十分さを感じていると思われる。一方、本学の学生は、世代の違う方々の意見や考えを聞く事ができる機会として大変有意義なものとして捉えている。ことぶき大学校生が満足する交流のあり方という課題が浮かび上がった。

## 3.3. 平成17（2005）年度および平成18（2006）年度

### 3.3.1. 特別講演の実施

平成17年度は、前年度（平成16年度）の反省点をふまえ、以下のように交流のあり方を変えた。なお、平成18（2006）年度の交流は、平成17年度と同様の内容で行われたため、両年度を合わせて記述する。

平成17（2005）年度および平成18（2006）年度では、グループ討議をする前段として、本学教員による特別講演を開催し、ことぶき大学校生の方々にも講演を聴いてもらうことにした。理由の一つは、ことぶき大学校生の方々が本学の知的財産に触れ、新たな学びの機会となればと考えたからである。もう一つの理由は、前年度では、グループ討議当日が初対面で打ち解

けるまでに時間がかかり、話し合いが進まない状況がみられた。この状況をなくすために、事前に1度顔合わせをし、自己紹介などで顔見知りの関係作りをしておくことで、本題のグループ討議で緊張することなく話し合いができるのではないかと考えたからでもある。

そして、この事前の顔合わせは、顔見知りの関係作りの機会としてだけでなく、グループ討議の内容や当日までに取り組む課題、討議当日の具体的な流れなどを説明する機会としても活用することができる。当日の流れなどの説明を事前にしておくことで、討議当日にはこれらを簡略することができ、事前の顔合わせは、時間の有効活用の点から効果のあるものと考えられる。

期日について、平成17（2005）年度の特別講演は平成17年6月15日（於本学）、1回目の交流は6月22日（於本学）、2回目は平成18年2月22日（於ことぶき大学校）。

特別講演の内容は、本学副学長小出進先生による「感じ合い、分かり合い、支え合い。人と人との最良の関係、それは感じ合い、分かり合い、支え合う関係」というテーマで行われた。

平成18（2006）年度の特別講演は平成18年6月（於本学）、1回目のグループ討議は6月（於本学）、2回目は平成19年2月（於ことぶき大学校）で、昨年度とほぼ同様の日程となっている。

特別講演の内容は、本学学科長大木みわ先生による「みんなちがって、みんないい」というテーマで行われた。

### 3.3.2. グループ討議内容の変更「ある村で起きた出来事」

当該年度1回目のグループ討議の内容について、前年度のテーマのあり方についての反省から、複数テーマを設定するのではなく共通したテーマ設定を考えた。また、多世代交流ということから世代の違いが反映するようなテーマ・内容はないだろうか、という視点に立ち、互いの価値観あるいは自分自身の価値観を問い直すようなものをグループ討議の内容として検討した。そこで、市販されている著書『ワークブック社会福祉援助技術演習①対人援助の基礎』（山田容 2004）を活用することとした。

### 3.4. テーマ「ある村で起きた出来事」を題材とした討議による交流について

#### (1) テーマ「ある村で起きた出来事」について

グループ討議の目的は、「同世代や他世代の人の意見・考えを尊重しながら、自他の価値観について考える機会を持つ」ことをねらいとした。このようなねらいを意図としたテーマ、内容を検討した結果、『ワークブック社会福祉援助技術演習①対人援助の基礎』の「自他の価値観(3)～二つの『物語』」の「ある村で起きた出来事」を利用することにした。

この本は、「社会福祉援助（ソーシャルワーク）に必要な援助技術について（中略）、ソーシャルワークを実践する社会福祉援助者（ソーシャルワーカー）になるための各種の援助

技術を習得すべく（中略）、その前提となる自己覚知と、価値観を中心とした他者理解、援助的コミュニケーションについて学ぶ」（山田容 2004: 3）ことを目的としている。

様々な考え方や価値観を持った人に対して支援をしていく介護福祉士は、自分自身の価値観、価値基準にとらわれない判断や視野が必要となる。介護福祉士をめざす本学の学生においては、自分自身を知るという自己覚知、自分を冷静に見る眼を養うことはとても重要である。また、自己覚知とともに他者をより理解するという力も養うことが必要とされている。

世代の異なることぶき大学校生との交流を、本学学生の自己覚知、他者理解の力を養う場として位置付け、この本のこのテーマを設定した。

この物語の利用にあたり、教員間の申し合わせの際、この物語は中世や教会、牧師など馴染みの薄い言葉の使用があり、西洋の話で実感が伴わないのではないかという意見があった。そのため一部言葉を変え（西洋→戦国時代、牧師→坊さんなど）、日本国内の物語として読めるようにした。また、個人で取り組む演習シートも、交流会のグループ討議用に変更をした。グループでの話し合いを記録する用紙も別途作成し、その記録に基づいてグループごとに話し合いの内容を報告発表してもらった。

このテーマの取り組み内容の概略は、物語の登場人物（4名）について、どの登場人物に共感、支持、納得できるか、その理由と順位づけをし、討議の際に必ず一人ずつ発言をする。そして話し合いながら、グループとしての考えをまとめていくものである。また、たとえ順位づけが同じであったとしても、その理由がまったく同じであることはないの  
で、違いが何であるのかなど、お互いの意見に耳を傾けることも、重要な目的である<sup>(注4)</sup>。

## (2) テーマ「ある村で起きた出来事」のグループ討議の感想〈平成17（2005）年度および平成18（2006）年度〉

### (2). 1. ことぶき大学校生の感想〈平成17（2005）年度のみ〉

ことぶき大学校の担当職員の方が感想記入用紙を作成され、1. 交流した感想はどうでしたか、2. こうしたら、より良かったと思う点はありませんでしたか、3. その他、となっている。以下、内容に応じて整理する。

#### ① 「交流した感想」

##### ○交流会そのものに対する感想

- ・「現在、小家族ですので、若い方との交流はあまりありません」
- ・「若い力を分けてもらったようで元気ができました」
- ・「自分の子供より若い人達と接する機会がありませんので、大変興味を持って参加

させていただきました。和気あいあいで良い雰囲気の中で交流ができて大変有意義でした」

- ・「年の差を感じさせないようなお互いの意見ができて、学生に戻った気持ちになれ、一時、年齢を忘れました」
- ・「若さあふれる学生たちとの対話はとっても楽しく有意義なひとときでした」
- ・「今の若者に会えうれしく楽しかった。意欲的に意見交換ができたと思った」
- ・「日常的に若者と話をする機会がないので、新鮮な気持ちで会話することができて良い経験ができました」
- ・「久しぶりの若い人との意見討論楽しかったです」
- ・「世代を超えて意見を聞かせてもらったことは有意義だったと思う」

ことぶき大学校生の多くの方が、この交流会を好意的に評価している。交流会の内容や交流時間について充分ではないという感想もあるが、普段の生活において若い世代との交流が少ない中、一つのテーマを題材に話し合いをし、時間を共有できたことを楽しく思えた様子である。

#### ○本学の学生の様子に関すること

- ・「1人1人と話をしてみると見かけに依らずしっかりした意見を持ち考えをはっきり言えて感心しました」
- ・「同じ班になった子は皆自分の信念を持っていて素直な子に思いました」
- ・「積極的に自身の考えを発表し、しっかりとまとめて発表できていた」
- ・「若いのにしっかりした意見考え方をいろいろ持っていて将来頼もしく感じました」
- ・「若い学生さんは意外（失礼）にしっかりしていて、真面目であるのに感心させられた」

本学学生の様子について、その印象が平成16（2004）年度の学生と平成17（2005）年度とでは大きく違う。平成16（2004）年度は「発言が少ない」「元気がない」などの感想が多かった。しかし、平成17（2005）年度はむしろ、学生の積極的な発言、積極的に取り組む姿勢など好意的な印象を持っていた感想が少なくなかった。

実際の話合いの様子からも、本学学生が発言している場面が多く見うけられた。

考えられる理由の一つに、事前のメンバーの顔合わせや話し合うべきテーマ、内容の事前説明があったことで、当日までに気持ちの準備や考えを整理することができたと思われる。

また、話し合う内容が介護福祉という専門的なテーマではなく、平易なある物語を題材としたものであった。当日までに行う個人作業も、遊び感覚のように取り組めるものであ

り、自分の考えを整理しまとめるのがそれほど難しくなかったと思われる。

話し合いでは、必ず一人ずつ発言する機会を設けることを申し合わせていたので、発言の偏りも少なく、互いの意見交換がなされていったと考えられる。

平成16（2004）年度では、話し合いに向かないと思われる難しいテーマもあり学生の発言が少なかったが、このたびのグループ討議ではその点が解消された様子である。

## ② 「こうしたら、よりよかったと思う点」

### ○交流時間について

- ・「もう少し時間が欲しかった。一つ的话题を少し掘り下げて考えてみたかった」
- ・「もう少し本音の聞けるまでの時間を共有したく思いました」
- ・「ディスカッションの時間がもう少しあったら両者の世代間の思想が理解できたと思われる」
- ・「打ち合わせを含め時間が少なかったようです」
- ・「1人1人発表してもらったので時間がかかり討議する時間が少なくなりました。あと10分くらい時間が欲しいかと思いました」
- ・「時間が短かった。昼食も一緒に雑談しながら食事等したら良かったかなと思います」

### ○話し合う環境について

- ・「共同〔1教室2つのグループ〕であったが雑音があり環境に配慮願いたい」
- ・「もっと静かな場所で少し考える時間をもらいながら話し合いをしたい」
- ・「名札をつけるようにした方が良い」

### ○討議内容について（物語の内容に対する意見、討議内容そのものに対する意見）

- ・「時代背景を今にしたら、また意見が違ったでしょうね」
- ・「物語を読んだディスカッションだけでなく、これから先の私達の生涯のこととか学生さんの将来の事など話し合ったら良かったと思った」
- ・「与えられたテーマに限定されてはそれ以上出て来ず、もっと広くフリーテーマで考え方を引っ張り出す方法を取りたかった」

## ③ 「その他」

### ○交流内容について

- ・「介護の様子も見せてもらいたいと思います」

- ・「介護される方も、する方も、生徒さん共に一緒に実技ができればと思います」
- ・「ことぶき大学校生の学生時代の思い、生き方等を話す機会が持てれば若き短大生の考えも何か変わるものが出てくるのではないかと感じられた」

上記の通り、交流時間や話し合う時間に関して、前回同様、物足りなさを感じている方が多くいた。また、教室の確保の難しさもあり、依然として話し合う環境のあり方が課題として残っている。

## (2). 2. 本学学生の感想

### ○交流会について

本学の学生は、この交流会を楽しく感じており、貴重な体験として捉えている。

- ・「全員それぞれの考え方を発表し合う事で新たな考えや発見があったりとても楽しかったです」
- ・「たった一つの物語なのに考えていることが様々でそれが世代、男女差でいろいろあり、これから物事を考えていく上で、一つにとらわれずいろいろな見方考え方ができるように頑張りたいです」
- ・「ことぶき大学校生の方は戦争を経験している方がいて、戦った大変さを知っているので、現代に生きる自分は恵まれているんだなと思った」
- ・「もう少し言いたいことはないのかを考える、みんなと違うところを見つけるなど、この交流会を通してとても考え方が変わり勉強になりました」
- ・「私達が知らないことや人生の先輩としての意見には、凄く深いものがありました。（中略）一つの観点からではなく、他方の視点から見ると、たくさんの意見を聞けた」
- ・「こういう考えもあるんだと新しい発見ができたし、とても有意義な時間になりました。（中略）良い経験になったし、違う世代の方々の話を聞いた貴重な体験になりました」
- ・「同世代の人との意見交換も重要ですが、他の世代の方との意見交換というののもとても重要だと思いました。私達とは違う視点で分析をしていました」
- ・「ことぶき大学校生の方は〔物語に対する〕読みが深く、経験豊かだと思いました。（中略）考え方が違えば、感じ方も違うのだということが分かりました」

これらと同じような感想が他にも多数あり、本学の学生は、ことぶき大学校生との交流から多くの刺激を受け、交流を有意義に感じている。

その理由に、普段日常的に接することが少ない世代との会話が新鮮で、同世代の友人知人とは違う考えや意見、発想を聞くことができる。感想にもあるように、「今まで生きて



きた経験から、物事をいろいろな視点、角度から見ることができる考えの奥深さ」や「それらに基づいてしっかりと自分の考えを述べる姿勢」など、交流を通して感じるものが様々あるようである。

また、ことぶき大学校生の方の中には、普段の生活で若者と関わるのが少ない方もおり、若い本学学生をあたたかく見守ってくださっている様子もうかがえる。本学学生が交流を「楽しい」と感じるができるのは、ことぶき大学校生の方々の話合いの進め方や発言しやすい雰囲気作りなどによるところも大きいのではないと思われる。この度のグループ討議と平成16（2004）年度のグループ討議で大きく違うのは、この度のグループ討議では「発言することができなかった」という反省の感想がなかったことである。自分なりの考えを発言できたことがうかがえ、話し合いに参加したという充実感につながっているのではないかと考えられる。

#### ○ことぶき大学校生の印象について

- ・「ことぶき大学の皆さん、とっても元気がよかったです」
- ・「高齢者とは思えないほど若々しくて、（中略）逆に元気をもらいました」。
- ・「今の私はまだまだ未熟者ですが、（中略）将来、ことぶきの学生さんたちのように経験豊富な元気で明るい人になりたいと思います」
- ・「ことぶき大学校生の方々は本当に若くて意見を主張するのが上手で、自分はまだまだだなあと考えてしまった」
- ・「正直失礼な話ですが、施設等でしか高齢者の方と関わったことがないので比べてしまうところがありました。逆に元気をもらった感じで意見を交換するときもハキハキと自分の考えている事を話したりと積極的で見習わなければならない点がたくさんありました」
- ・「今まで高齢者と接する時は実習先の老人ホームなどでしかなかったもので、比較的元気がないADLの低い方としか接することがなかった。なので、ことぶき大学の学生さんたちは、目標を持って、生き生きと活発ですごいと思いました」

交流をする前に持っていた高齢者のイメージが、交流後に変わったとも受け取れる感想である。ややもすると、高齢者を支援の対象者としてイメージする傾向にあるが、高齢の方々から学ぶべきことが多くあることを改めて認識したのではないかと考えられる。

#### 4. ま と め

交流内容はグループ討議という形で、あるテーマに添って互いに意見を出し合う。それ自体

は特別なものではないが、世代の異なる方々とのグループ討議なので、本学学生は、普段付き合う同世代の友人知人とは違うものの見方、視点の奥深さを感じ、新たな気づきなど多くの学びがある。

また、高齢者に対するイメージも、支援の必要な対象としてではなく、長く人生を歩んできた先輩として、学ぶことの多い方々として改めて認識する機会にもなっているのではないかと考えられる。グループ討議で自分の考えを他の人に伝えることの難しさを感じつつ、古くて新しいことぶき大学校生の方々の話を聞くことができるのは、本学学生にとっては貴重な体験である。このようなことから、ことぶき大学校生との多世代交流は、大変意義のあることと思われる。

一方、ことぶき大学校生の多くの方は本学学生との交流を好意的に受けとめてくれているが、交流内容の物足りなさや交流時間の短さなどを感じている方もいる。

交流のあり方として、ことぶき大学校生は、介護福祉のことをより専門的に学ぶ内容や介護福祉に関連する討議テーマを希望している。たとえば、実践的な実技演習を兼ねた交流や介護福祉の現状など知識が深まる交流を希望していると思われる。交流時間についても、90分では短く、もっと長い時間交流をして、話をしてみたいと思っている方が多い。

今後、本学学生の学びだけでなく、ことぶき大学校生の方々も学び満足するような交流のあり方をさらに模索していくことが求められる。

## 注

- (1) 高校卒業後すぐに入学してきた学生がほとんどだが、一部社会人枠で入学し、20歳より年齢の高い学生もいる。
- (2) 60歳～80歳代と、年齢層は広い。
- (3) 感想の記載について、できる限り原文のまま表記しているが、わかりにくい箇所は一部加筆修正をした。また、〔 〕カッコは、執筆者が補足した。
- (4) より詳しいことは、『ワークブック社会福祉援助技術演習①対人援助の基礎』（山田容 2004）を参照いただきたい。

## 文 献

伊藤和子（2006）「介護福祉学科で学ぶ学生の高齢者意識の実態と介護福祉教育の課題」愛知江南短期大学紀要，（35），59-94，nifty@searchで「高齢者観」をウェブ検索し，PDFファイルにて2007年4月2日に取得。

内閣府（2004）『平成16年版高齢社会白書』ぎょうせい。

山田 容（2004）『ワークブック社会福祉援助技術演習①対人援助の基礎』ミネルヴァ書房。